

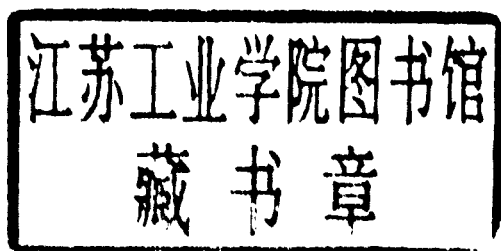
日本語教育指導参考書18

敬語教育の基本問題(下)

国立国語研究所

日本語教育指導参考書18

敬語教育の基本問題(下)



国立国語研究所

日本語教育指導参考書 18

敬語教育の基本問題（下）

平成4年5月25日 初版発行
平成11年12月20日 2刷発行 定価は表紙に表示しております。

著作権所有 国立国語研究所
〒115-8620
東京都北区西が丘3-9-14
電話(03)3900-3111
発行 大蔵省印刷局
〒105-8445
東京都港区虎ノ門2-2-4
電話(03)3587-4283～9

落丁、乱丁本はお取り替えます。

ISBN4-17-311418-4

刊行のことば

「日本語教育指導参考書」は、外国人に対する日本語教育に携わっている方々の指導上の参考に供するため刊行するものです。

今回は、その第18編として「敬語教育の基本問題 下」を刊行します。本書の執筆をお願いした方は、次のとおりです。

窪田富男氏（東京外国語大学教授）

本書が教授上、研究上の資料として適切に活用されることを期待します。

平成4年3月

国立国語研究所長

水谷 修

目 次

VII	待遇表現と敬語	1
1.	待遇表現と敬語の位置	1
2.	待遇表現の言語的構造	2
3.	待遇表現と軽卑語の位置	6
4.	談話と敬語レベルの転換	8
5.	日本人の敬語意識	11
VIII	敬語の分類と文法	16
1.	形式による分類	16
2.	意味・用法による分類	19
3.	尊敬語・謙譲語動詞の文法	24
IX	話体の文法と意味	33
1.	動作主への配慮と聞き手への配慮	33
2.	話体に関わる文法問題	38
3.	話体の種類と意味・用法	43
4.	話体の比喩的解説と相互関係	52
5.	文の基本形とデス・デシタ・デショウ	55
X	「お・ご」の意味・用法	58
1.	学習者の疑問	58
2.	「お・ご」の固定的用法	59
3.	動作主・所有主への配慮	62
4.	動作・状態のかかり先への配慮	65
5.	美化語の「お」	70
6.	「お・ご」の付加と自然さ	71
7.	小さな調査から	77
XI	文の敬語化	81
1.	動詞句の敬語化	81
2.	補文の敬語化	88

3. 複合用言の敬語化	95
XII 聞き手と丁寧さ	100
1. 場面差と語形選択	100
2. 聞き手の心理と語形選択	103
3. 文法と語用論	112
XIII 発話行為と敬語	116
1. 敬語の状態性と動作性	116
2. 授受表現とその待遇性	119
3. 行為要求表現と敬語	130
付録：「これからの敬語」	138
参考文献	144

VII 待遇表現と敬語

1. 待遇表現と敬語の位置

すでにおおまかに見たように、表現の使い分けをするのには目的があり、人間関係の保持や親密化であったり、離反や破壊であったり、場合によっては、個人のフラストレーションの解消であったりする。そうしたことは使いの変化が、どのような条件——言語外的条件（社会的・心理的人間関係や場面など）や言語内的条件（音声・語彙・文法など）——によって成り立っているかを、理論的・体系的に記述しようというのが「待遇表現」の研究である。そうすると、待遇表現の研究にはずいぶん広い問題が関わっていることがわかる。そのすべてはとても取り上げられないので、以下、言語内的条件のうち、主として語彙と文法の問題を扱うことにする。

待遇表現は、ふつう、ことば使いの〈丁寧さ politeness〉という面から観察される。〈丁寧さ〉は、人間の言語行動を支える普遍的な基本原則のひとつと考えられているからである。しかし、丁寧さの違いは無限に連続的な性格のものである、しばしば言語形式に依拠して、簡略化して扱われる。つまり、格別に改まったり格別にくだけたりする心的態度を必要としない表現をニュートラルなレベルの表現（0 レベル）だと仮定すると（このニュートラルのレベルは現実存在するか否かではなく記述上の仮説である）、それより丁寧な表現をプラス（+）のレベル、それよりくだけた（あるいは、さげすんだ）表現をマイナス（-）のレベルにあるものとして、三段階に大別することができる。この大別は語、句、節、文、談話、その他の各単位についても可能である。例えば、次のような表現形式やレベルの位置づけがありうる。

+ Aさんも 明日 こちらへ いらっしゃる そうです。

0 Aも あした ここへ 来る そうだ。

- Aのやつも あした こっちへ 来やがる ってよ。

むろん、これらの表現形式は一例であり、実際には、さらに多くの語形式の中から選択され組合わされて多様な文が構成され、そのレベルは切れ目なく連続して存在する。従ってこのような段階づけは、弁別の特徴を示すための簡略化であったり、教育上の分かりやすさを考えた便宜的な表示法である。

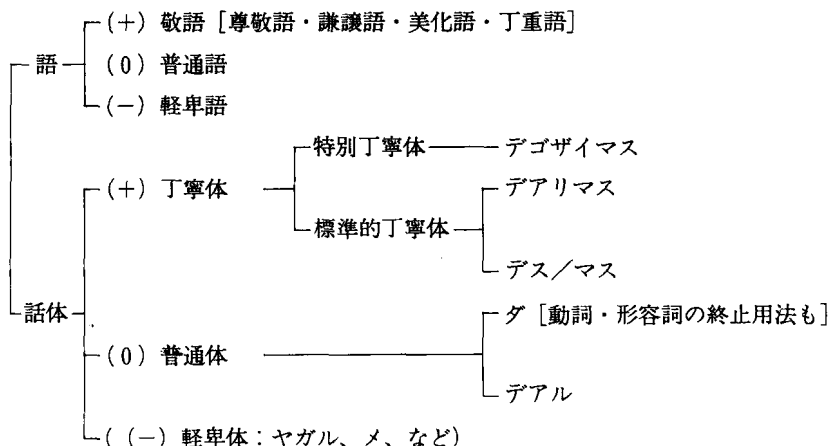
従って、いわゆる敬語あるいは敬意表現がこのプラス・レベルに属するものとすれば、マイナス・レベルに属する軽卑語あるいは軽卑表現は、マイナス敬語あるいはマイナス敬意表現と呼ぶことができる。即ちいずれも待遇表現の一部である。従来、待遇表現という、このプラス・レベルのものだけに注目が向く傾向が強かった。それには理由があるが、日本語学習者に対しては特に、他のレベルの表現と比較・対照してその位置づけをはっきりさせなければ、その性格も効果も分かりにくい。敬語（敬意表現）も軽卑語（軽卑表現）も他と遊離して存在しているわけではないからである。

さらに留意しておきたいことは、ニュートラル・レベル（0）の表現は、プラス・レベル（+）の表現と対比的に用いられるときはマイナス・レベル（-）のはたらきをしやすい、マイナス・レベルの表現と対比的に用いられるときは、プラス・レベルのはたらきをしやすいという性格を持っているということである。

2. 待遇表現の言語的構造

話し手と聞き手（送り手と受け手）があり、目的があって初めて成り立つ言語行動の最小単位を〈文〉だと仮定すると、日本語の〈文〉は基本的に「語＋話体」という構造をもっているといえることができる。この場合の「語」は言いたいことの実質的な内容を表す部分であり、「話体」は、その実質的な内容を包み込んで、聞き手に送り届ける話し手の表現態度を直接的に表している部分である。この「話体」は一般には「文体」とか「スタイル」、あるいは「話調」とか「ダの体」「デス・マスの体」などと呼ばれるものごとである。したがって、「コト（事柄 Proposition）＋ムード（心的態度 Modality）」などの用語で説明される文構造の理解と同じ概念である。このように考えると、前

述の丁寧さのレベルにウエイトをおいて見た日本語の文の基本構造は（書きことばも含めて）、次のように表すことができる。



つまり、日本語の〈文〉は、現実が発せられる限り、いずれかの「語」を選択し、その用法は上記のレベルのうちのいずれかの「話体」に義務的に支配されることになる。従って、上図は文の構成要素を中心に見た「待遇表現の言語的構造」ということができる。「話体」を重視した構造といってもいいだろう。「話体」はまたスピーチ・レベルから見た〈文〉の文法的類別のための名称でもある。

この場合、助動詞「(ら)れる」や形式動詞の「お～になる」「お～する」などは、「語」の構成要素として扱われる。軽卑語化の接辞「～やがる」については後述する。

一方、文終止の「ダ」「ル」(動詞の終止用法：スル・シナイ・シヨウ・シロの類)・「イ」(形容詞の終止用法)・「デアル」などは、その待遇機能を重視して「普通体」とし、「丁寧体」を構成する「デス・マス・デゴザイマス・デアリマス」の待遇機能と対比・対立させる。従って、伝統的な敬語3分類の

うちの「丁寧語」、および次章で紹介する「対者敬語・丁寧語」は、「語」から切り離して「話体」扱いとすることになる。(上図の敬語に含まれる「丁寧語」は「丁寧語」ではない。次章の敬語の分類参照。)

「普通体」を他の話体と同じように特立させるもうひとつの理由は、教育上の効果のためである。日本人の通常の談話においては、この話体がはげしく混在しているにもかかわらず全体的な見通しが与えられていないということだけではなく、たとえば、「お〔呼び〕です／でございます」は指導されても、「お〔呼び〕だ(よ)」の形は無視されるくらいがあるからである。敬語「お呼び」に直接「だ」が接続しうるということを知らない場合が多いのは、「話体」への注目がおろそかにされているせいだと考えられる。

以上のことを、動詞一語文(たとえば「行く(よ)」「いらっしゃる(かね)」)を例に取って「語」と「話体」との関係を説明すれば、次のようになる。

行く：語 [行く／ik-] + 話体 [-く／-(r)u] ……普通語の普通体用法

行きます：語 [行く／ik-] + 話体 [-ます／-i-mas-(r)u]

……普通語の標準的丁寧体用法

行かれる：語 [行かれ-／ik-are-] + 話体 [-る／-(r)u] ……尊敬語の普通体用法

行かれます：語 [行かれ-／ik-are-] + 話体 [-ます／-(i)-mas-(r)u]

……尊敬語の標準的丁寧体用法

おいでになる：語 [おいでになる／oideninar-] + 話体 [-る／-(r)u]

……尊敬語の普通体用法

おいでになります：語 [おいでになる／oideninar-] + 話体 [ます／-i-mas-(r)u]

……尊敬語の標準的丁寧体用法

いらっしゃる：語 [いらっしゃる／irasshar-] + 話体 [-る／-(r)u]

……尊敬語の普通体用法

いらっしゃいます：語 [いらっしゃる／irasshar-] + 話体 [-ます／-(r)i-mas-(r)u]

……尊敬語の標準的丁寧体用法

行きやがる：語 [行く／ik-] + 話体 [やがる／-i-yagar-(r)u]

……普通語の軽卑体化(語と共存)

このことは、語彙は厳密には形態素を意味し、その選択は動作主への配慮の違いを表しており、話体は聞き手への配慮の違い、つまり実際に使う形(実現形)を表していることを示している。注意しなければならないのは、「行く」「いらっしゃる」も、「行かれる」「おいでになる」も、〈文〉として使われるときは、「話体」を持っているということである。つまり、「行きます」が普通語「行く」の標準的丁寧体用法であるように、「いらっしゃる(かね)」は、尊敬語「いらっしゃる」の普通体用法であり、「いらっしゃいます」は、尊敬語「いらっしゃる」の標準的丁寧体用法である。つまり、「語」と「話体」との相互承接は一樣ではない。このことを知らないと、「あなたも、いらっしゃる?」「めしあがる?」のような言い方は説明しにくい(このことは、IX章でも触れる)。これらのことを一言で言えば、丁寧体と普通体との差は「マス／-mas-」という要素の有無であり、「語」が敬語であるか普通語であるかは関係しないということである。なお、ここでいう普通体は〈文末用法〉のことであり、連体用法では原則的に待遇機能が失われ、統語機能のみを持つことになる。

「行きやがる」の「-やがる」は、上図の語としての軽卑語の範疇にも話体としての軽卑体の範疇にも属させることができ、語彙的な性質と話体的な性質とを共有している中間的な存在であるが、ほとんど話体化しているものと見られる。尊敬語化の「お～になる」や「(ら)れる」などとは反対に、動詞を軽卑語化する付属辞であり、「あれ、雨が降りやがる／-やがった!」「おい、あいつも来やがるよ」「さっさと、行きやがれ!」などが普通の用い方であるが、「親方、あいつも行きやがりますぜ」などという言い方も可能であり、語彙的にも話体的にも扱うことができる。しかし、「-くさる」などと同様に活用機能の制限は大きい。

また、「～と思う」「(～に)ちがいない」などの認識的ムード形式は、語尾(-r)u/-i)を除いて、ここでは語彙範疇として扱うことになる。

ここでひと言つけ加えておかなければならないことは上記の「語」と「話体」とは截然と分割されるかのように扱っているが、これは文の基本構造を

理解するためであり、すべての場合にこれだけで説明できるわけではないということである。「語」と「話体」とは分かちがたく結合している場合もあり、上図の〔丁重語〕はその例である。このことは次章で述べる。

いずれにしても、「話体」はプラス・レベルを表す文法形式は発達しているが、マイナス・レベルを示す文法形式は独自には存在せず、ニュートラルのレベルで代用されるか、文末の音声的くずれや、「-やがる」「-くさる」「-め」のような準語彙的な性格の要素で表される。現実の文（発話）は、上記以外に、さらにさまざまな音調や終助詞などが加わったり、述語が省略されたりして、表現の意図や態度が形成される。

また、上に述べたことの全体は「広義の待遇表現」とも呼ばれる。従って、両端に位置するプラス・レベルの敬語（敬意表現）とマイナス・レベルの軽卑語（軽卑表現）とは、ともに「狭義の待遇表現」である。（意味的な構造については上巻IV章の1を参照）

3. 待遇表現と軽卑語の位置

本書の主要な目的ではないが、ここでマイナス・レベルの軽卑表現（さげすみの表現）について少し触れておく。従来、待遇表現の研究といえば、丁寧さのプラス・レベル、つまり敬語や丁寧体を含む表現を扱うことが中心であり、国語研究のなかでも大事な一分野を占めてきた。広義の待遇表現に目が向くようになったのは比較的最近のことである。しかし、軽卑語や軽卑表現については、量的に決して少なくないと考えられているにも関わらず、研究はあまり進んでいない。

このような扱いを受ける理由は十分にあり、社会的存在としてのことばの性格を如実に反映しているし、ことばの使い方というものがイデオロギーと深く結びついていることを証明している。また、敬意表現のほうは言語研究として、形態論的（morphological）にも文体論的（stylistic）にも、類型化がしやすい発達を示しているのに対し、軽卑表現（悪口雑言・陰口・隠語・集団語等を含む）のほうは、反社会的・反道徳的と考えられる傾向が強い

えに、言語的に類型化がしにくい存在——語彙的段階にとどまる存在——であると考えられてきたからである。まして〈教育〉にこの軽卑表現が取り上げられることほとんどない。あるとすれば、〈それを使うな〉という趣旨においてであろう。言語現象の一方向のみに価値観の目が向いてきたのも理由のあることである。

しかし、軽卑表現も社会言語学的にあるいは文化論的（サブ・カルチャーを含めて）に重要な役割を担っていることは、われわれの日常の言語行動を注意深く観察すれば、理解困難なことではない（たとえば、私的な場では、いかにフラストレーションの解消に役立っていることか、ひいては人間関係の強化に役立っているか）。敬語は人間関係の潤滑油だといわれるが、軽卑表現もまた裏から支える潤滑油なのである。待遇表現という用語の広まりは、この一方的な価値観から解放されて、日本語全体を見たいという欲求を意味している。社会的に有意義に顕在化し推奨されているものばかりでなく、同じく有意義に存在しながら抑制され潜在化しがちなものにも、個人・集団・社会の各レベルで、分析の目を向けることが言語研究には要求されていると考えるべきであろう。

いうまでもなく、敬語が敬意を示したり好ましい人間関係を保持したりする機能とは逆の機能も持っているように、軽卑語も軽蔑や人間関係の離反にだけ利用されるものではない。とくに、失敗や恥ずかしさなどをカバーする場合に自虐的に用いられる軽卑表現は何を意味するのであろうか。また、多くの外国人学習者が抵抗を覚える（従来の一般的な説明による）謙譲表現は、あえていえば、尊敬語に対する自己側軽卑表現であるという性質を無視できないように、下位者（扱いする者）に対する軽卑表現とどのような関係を持っているかを考えてもおかしくないような気がする。

また、先に、軽卑語（軽卑表現）は類型化がしにくい存在であると述べたが、これは敬語（敬意表現）の研究法と類似の発想から逃れられていないからかもしれない。今後、言語学的にも心理学的にも研究が進めば、類型化ないし文法化が期待できない存在ではないかもしれないのである。この軽卑表現

の中にもまたさまざまなレベルがあることは十分予想できる。

しかしながら、一般的な〈教育〉における扱いは、好ましい人間関係とは何か、ということを考える限りにおいては、敬意表現と同列に論じられるものでないことも明らかであろう。この軽卑語の研究では、社会言語学の立場からなされた星野命（1971a, 1971b）がよい参考になるし、語彙的な分野については筒井康隆（1967）が興味深い試みをしている。「罵り」の日中対照研究には浜田麻里（1988）がある。

4. 談話と敬語レベルの転換

われわれの日常接する「談話」を「文」の単位でみると、敬意表現（＋レベル）や非敬意表現（0／－レベル）は上述のような言語的構造をなしている。しかし、それらの文は、意味さえ正しく伝われば、他の文と関係なく用いられるというものではなく、参加者、状況、話題などによって「語」の選択、「話体」の選択、およびその組み合わせによって激しくかつデリケートに行われ、それによって、話し手と聞き手は相互に心的態度を確認し合いながら「談話」を展開している。日本語教育においても、談話重視の教授法はかなり進んできている。

生田・井出（1983）は、社会言語学の立場からの談話の研究で、談話の種類をまず話しことばと書きことばに大きく分け、それぞれに属する具体的な言語活動の諸分野に敬語表現がどう関わっているかを、次の表1のように鳥瞰図的に示している。（表中の0レベルは敬語表現が現れないものをさす）。

こうした一覧表は、学習者に日本人の言語行動と敬語との関係について、大きく把握させるのに役立つ。ただし、敬語レベルが＋で一定しているものは、そこに現れる言語要素のすべてが敬語ばかりだと思わせてはならない。この表はまた、必要に応じてもっと細分化し、学習者に自分の学習内容の位置づけを自覚させることもできる。

表1 敬語のレベルと談話の種類（生田・井出（1983）から）

		話しことばの談話		書きことばの談話
		会 話	モノローグ	モノローグ
(a) 敬語レベルが 一定のもの	+	あらたまった 挨拶 試験の面接	式辞・弔辞 演説	公式書簡 公式招待状 推薦状
	0	非常に親しい 人との会話	ひとりごと	論文 新聞記事
(b) 敬語レベルの 混用がみられ るもの	+ / 0	日常会話 雑談／おしゃ べり 対談 討論	大学等での講 義 物語 説明／報告	家族・友人間の手 紙 くだけたエッセ イ／雑誌記事

こうした分類を基にすると、日本語教科書について、次のことが考えられる。

- ① 教科書の文表現が話しことばを意識し、〈デス・マス体〉を守っている限りにおいては、尊敬語や謙譲語が出てこなくても、上表の会話の範疇で、(a)で+、つまり敬語レベルが一定のものに属する。ただし、プラス・レベルの敬意表現としては（話体の選択に頼っているだけなので）もっとも低いレベルに属する。
- ② 入門・初級の段階から話しことばを意識し、〈自然な日本語〉を重んじたものであれば、上表の会話の範疇で、(b)で+または0、つまり敬語レベルの混用が見られるものに属する。この場合は、混用とは何か、使い分けは何に基づくか（使い分けの原則は何か）の説明が必要になる。同時に、類似のことは他言語にもあるので、教師の外国語教育としての日本語教育観や教授法についての強固な考え方が要求される。あえていえば、入門・初級の段階から、文字どおり〈自然な日本語〉を与えることには、

無理が伴う。

- ③ 学習レベルが上がることは、上表の左から右の方向へ、上から下への方向へ進むことだとおおまかにいえる。語彙的にも文法的にも言語表現が複雑になり、文体的多様性をもつ文章を学ぶことになるからである。したがって、教科書の内容について過不足なく積み重ねを考える場合は、膨大なものとなるので、通常は、学習目的にしたがって、上表のいずれかの言語活動の分野（ひとつ以上の組合せも）に焦点を合わせることになる。その場合になんらかの〈欠落〉が起きやすいが、しかたがないと考えるのが一般的である。

上記のことは、狭い意味の待遇表現から広い意味の待遇表現への指導の漸進的移行も意味する。冗談や皮肉や諧謔（時にはある種の軽卑表現）も含まれ、しかも相手（聞き手・読み手）に不快感を与えない高度な待遇表現が学べるような教科書はまだない。

なお、生田・井出（1983）は、上表の、敬語レベルが一定でないもの、混用が見られるものに注目して、どのような要因が発話の敬語レベルを決定するのか——敬語レベルのシフトが起こるのか——の研究が進んでいないことに触れ、次の3つの要因のそれぞれと相互関連の究明の必要なことを指摘している。

- ① 社会的コンテクスト。談話を通して主体となる敬語レベルを決める。
- ② 話者の心的態度。談話内で相手や話題となっている事柄に対する話者の心的態度の変化を表明するため、敬語レベルをシフトさせる。
- ③ 談話の展開。談話内の話の流れ、あるいは論理の展開を明確に示すため、敬語のレベルをシフトさせる。

①は日本語教育にとっても最も基礎的なことであるが、学習者の能力が向上するに連れて、②の要因についての理解が不可避となり、それがないと学

習者の疑問は増幅される。日本語話者の場合は、話し手の相手に対する心的距離を敬語レベルをシフトさせることで調節しており、これが一見無原則に見えるところから、教師も学習者も困るわけである。その指導のためには、③の観点が必要になる。談話が通常いくつもの小さい話題から構成されているものとする、その話題と話題との論理的関係を明確にするために敬語レベルのシフトが行われ、全体としての談話が起・承・転・結のごとき流れを作っていることが多いと考えられる。このことは、ひさしぶりに会った知人であっても、初対面の相手であっても（たとえば、店員と客、タクシー運転手と客など）、その会話は初めは比較的丁寧な言い方が多く、中ほどはくだけた表現になり、別れぎわにまた丁寧になるということは、よく経験するところである。そしてこのような言語行動は日本人の人間関係保持のためにひとつの型となっているようである。

5. 日本人の敬語意識

日本人の敬語使用や敬語意識の実態については、国立国語研究所によって行われた各種の大規模な研究がその代表的なものである（参考文献参照）。そのほかに田中章夫（1969）、吉沢典男（1973）、NHK（1980）などもある。

ここでは、すこし古い実態調査の結果報告であるが、興味深い指摘が多々あるのでそれを紹介することにする。国立国語研究所では、昭和27・28（1952～53）年度に三重県上野市と愛知県岡崎市で、敬語行動と敬語意識についてくわしい実態調査を行い、その調査結果を『敬語と敬語意識』（1957）で、次の25項目にまとめている。敬語について考えなければならない主要点が指摘されていて、日本語教育にも大いに参考になる。

- 1) 否定的要素を含む敬語形式（たとえば「いただけませんか」とか「くれんか」など）は、発話全体として、否定的要素を含まない敬語形式（たとえば「いただけますか」とか「くれ」など）よりは一般にていねいと意識されている。